

目次	
口絵	
序	
凡例	
細目次	
第一章 地方体制の確立と地域の対立	3
第一節 県制の実施	3
第二節 郡制の実施	15
第三節 市制・町村制の実施	31
第四節 地域の対立と行政争訟	49
第二章 政党勢力の拡大	79
第一節 帝国議会開設後の政党勢力の台頭	79
一 自由党の勢力拡大	79
二 立憲改進黨と尾西・豊橋地方への進出	100
第二節 政友会の成立と展開	111
一 「大政友会」の成立	111
二 政友会の優勢と動揺	121
第三節 地方名望家と政党	139
一 地方名望家加藤六蔵と地域振興（議会活動・教育・鉄道）	139
二 愛知県下の地価修正運動と地租増徴問題	149
第三章 濃尾地震と政治・行政	169
第一節 地震の発生	169
一 地震直後の被害報告	169
二 初期救護活動の展開	181
三 被災者の救済と備荒儲蓄金	190
第二節 国家的、国民的一体感の形成—恩賜金をめぐって	202
第三節 復興をめぐる政治・行政	218
一 防災への視点	218
二 北海道移住問題	227
三 地租延納と東春日井郡の紛擾	230
四 復旧工事の進捗	239
第四章 地域基盤の整備	251
第一節 鉄道網の整備—中央線の誘致と県内の鉄道計画	251
一 中央線をめぐる県内の動き	251
二 県内各地の地域構想と鉄道計画	265
第二節 港湾の整備—武豊港と熱田築港	289
第三節 木曾川下流改修工事の進展	315
第五章 郷土意識とその政治化	341

第一節 郷土意識の形成と政治的役割	341
一 三河郷友会と三河の郷土意識	341
二 郷土意識の政治化—三河分県論の再燃	347
三 額田県再置運動の展開と挫折	357
四 「郷土愛知」の完成と尾張の郷土意識	376
第二節 岡崎・中村・清洲公園と愛知県	383
一 岡崎城の公園化	383
二 豊国会と中村	384
三 清洲城址保存会	393
四 三大公園の整備	395
第三節 国民国家と文化財の創出—愛知県における文化財調査	403
一 臨時全国宝物取調局の愛知県調査	403
二 古社寺保存法と愛知県	408
三 名古屋離宮としての名古屋城	414
第六章 地域社会の管理と衛生・医療・性	423
第一節 警察制度の一断面—治安対策と衛生	423
第二節 衛生行政の展開と地域社会	441
一 伝染病の流行と衛生行政	441
二 医療制度の整備	456
第三節 遊郭の管理	468
一 税収をめぐる対立	486
二 移転をめぐる対立	492
三 性風俗業の管理	501
第七章 帝国化の中での軍事行政	515
第一節 第三師団の成立	515
第二節 陸軍演習の本格化	526
第三節 軍事行政の展開と混乱	541
第四節 徴兵慰労会の活動の破綻	560
第八章 日清戦争への対応とその影響	579
第一節 開戦と戦争への対応	579
第二節 軍事徴発と軍資献納	585
一 義勇軍運動	585
二 軍役夫動員	589
三 馬匹徴発の本格化	599
四 軍資献納と軍事公債募集	608
第三節 捕虜	615
第四節 戦争の終結	642
一 戦捷祝賀会	642
二 軍役夫の処遇	646

三 従軍者家族の救護	652
四 軍事思想強化	656
第九章 日露戦争と帝国体制	663
第一節 日露戦争開戦とその後の推移	663
一 開戦と戦意昂揚	663
二 宣戦布告と国際法	671
三 捕虜の処遇	673
第二節 戦争の進行と動員の拡大	680
一 動員の拡大	680
二 軍資献納と公債応募	682
三 軍事郵便	697
四 下賜金の交付	702
第三節 戦争の諸矛盾と行政の対応	707
一 地域社会への影響	707
二 動員態勢の長期化	716
三 碧海郡西端村にみる戦病死者葬儀	720
四 出征軍人遺家族の困窮とその救護	726
第四節 戦争の終結	741
一 戦争の終結	741
二 戦後の遺家族援護	745
第十章 戦争の記念・記憶化という政治	753
第一節 日清戦争と戦争の記念・記憶化	753
一 戦争報道と戦争の記憶化	753
二 戦没者慰霊と「美談」の収集	765
三 戦争記念碑建設活動	781
第二節 日露戦争と戦争の記念・記憶化	796
一 戦果の展示	796
二 戦没者慰霊をめぐって	805
三 記念活動と都市計画	817
解 説	821
頻出・難読語句一覧	
あとがき	
資料提供者及び協力者	
愛知県史編さん関係者名簿	